

日伯関係半世紀と今後の展望

2019年12月11日

@Japan House Sao Paulo

駐ブラジル日本国大使 山田 彰

1. ブラジルと私

(1) 皆さん、こんばんは。

本日は、ジャパン・ハウスで日伯関係について講演するという機会を与えていただいたことに感謝いたします。2017年8月に日本大使として着任して以来、ジャパン・ハウスにおいてポルトガル語で講演することが私の大きな目標の一つだったので、感慨深い思いがします。

本日は、『日伯関係半世紀と今後の展望』というちょっと大げさな講演タイトルをつけましたが、私のブラジルとの個人的な関わりをご紹介しながら、日伯関係の過去と現在、未来をお話ししたいと思います。

私とブラジルのつきあいは長いのですが、ポルトガル語を勉強し始めたのは、大使着任後であり、まだまだ私のポルトガル語は十分ではありません。時々、Portonhol に変わったりすることがあるかもしれませんが、その点をご容赦を願います。

(2) タイトルに「半世紀」とありますが、50年前の私にとって、ブラジルは地理の教科書や本の中の存在でしかありませんでした。ブラジルに渡った日本移民についての小説を読んだり、ブラジル経済の奇跡についてのニュースを目にしたりするくらいでした。

1976年末、大学1年生の時に、初めてブラジル(ブラジリア、リオ、サンパウロ)とメキシコ、アルゼンチンを訪問しました。福岡県の青年商工会議所が三カ国の福岡県人会を訪問するミッションを組織し、私はその末席メンバーとして参加したのです。初めて訪れるラテンアメリカの印象は、『とにかくスケールが大きい。』というものでした。飛行機で何時間飛んでも、アマゾンの熱帯林は終わらないような感じを受けました。ブラジリアは、1976年の私にとって、SF小説に出てくる『未来都市』のようなイメージでした。この旅行は、いろいろな意味で私の人生に大きな影響を与えたと思います。

1981年外務省に入省して、第一外国語としてスペイン語を研修することを希望しました。希望理由の一つは、前述の旅行を通じて、「ラテンアメリカは、希望と可能性の大陸だ」と考えたことにありました。

スペインでの研修後、在アルゼンチン大使館に勤務し、その後外務省本省では、

中南米関係と経済協力関係のポストに長く務めました。様々な部局で、ブラジル関係の仕事をし、ブラジルにも何度も出張しました。最後のブラジル出張は、2014年の安倍総理の中南米歴訪に、中南米局長として同行したことです。在外では、米国(ワシントン)、イラク、スペイン、そしてメキシコでは大使として勤務し、2017年8月に大使としてブラジルに着任しました。ブラジルに住むのは初めてですが、私がブラジルと長いかわりがあったことはおわかりになったと思います。

2. ブラジルと日本 ～これまで～

(1) 日本とブラジルの外交関係は、1885年締結の『日本ブラジル修好通商航海条約』に始まります。ブラジルへの日本人移住は1908年に始まり、昨年は移住百十周年を迎え、各地で記念イベントが開催されました。7月には眞子内親王殿下がブラジル5州14都市を訪問し、各地での記念行事、歓迎行事に参加されました。自分も、その全行程に同行しましたが、各地における州・市政府、ブラジル国民、日系社会の殿下に対する歓迎ぶりが印象的でした。

今日の、日本とブラジルの緊密な友好関係を作った大きな要因の一つは、日本人移住者、日系人の存在があります。彼らは移住後大変な苦勞も味わいましたが、ブラジルにおいて勤勉に努力を重ね、ブラジル社会の信頼を勝ち得て、ブラジルの発展に大きく貢献しました。今日、ブラジルには日系人が約200万人います。これは、日本以外の日本人・日系人数としては世界最大です。一方、日本にはブラジル人が約20万人居住しており、これはブラジル外のブラジル人コミュニティとしては、米国、パラグアイに次いで3番目の大きさです。かくも遠く離れた両国なのに、両国の人的な絆はまことに深いものがあるのです。

(2) 日本とブラジルの両国は、日米開戦(1941年)後の1942年1月に国交を断絶しました。日本の敗戦後、ブラジルの日本移民は苦しい日々を過ごすことになりました。しかし、1952年4月の国交正常化と共に、同年12月には対ブラジル移住が再開し、50年代後半から日本の総合商社やメーカーがブラジルに活発に進出するようになりました。

その後、日本は、政府・政府関係機関及び民間企業が協力して支援する様々な大型の『ナショナル・プロジェクト』をブラジルにおいて実施し、ブラジルの経済発展に大きく貢献してきました。50年代に開始したウジミナス製鉄、70年代に開始したセニブラ紙パルプ開発、セラード農業開発、カラジャス鉄鉱山開発、アマゾン・アルミ(ALBRAS)等です。私も、こうしたプロジェクトにわずかながらも関わりがありました。

その中で、本日皆さんに特にその重要性を知ってほしいのがセラード開発事

業 (Prodecer=Programa de Desenvolvimento do Cerrado Japão-Brasil) です。二十年以上にわたり、日本が技術、資金、人材面でブラジルと協力した、この PRODECER について、私は、日本、ブラジル、世界の人々にもっと知ってもらいたいと思い、常々次のように語っています。

『PRODECER は、不毛の大地と言われた『セラード』を世界有数の農業生産地域に変え、ブラジルを世界最大の大豆輸出国にするなど、ブラジルを世界の農業大国に押し上げた。PRODECER は、そのスケールとインパクトの大きさに鑑みて世界の農業史に記録される一大プロジェクトであり、日本人とブラジル人が誇ることができる、日伯協力の象徴的な成功案件である。』セラード開発における日伯の農業協力は、今日アフリカでも三角協力の形で発展しています。

(3) 1981 年に私が外務省に入った後、ブラジルなど中南米諸国では累積債務問題、ハイパーインフレが起こり、特に日伯経済関係では困難な状況がありました。そうした中でも、上述のセラード開発をはじめとする各種の経済協力は、両国関係者の熱意に支えられ継続されました。21 世紀に入っても、日本とブラジルの間には、様々な協力が行われています。

地上デジタル TV の日本システムの採用と、日本とブラジルが協力して同システムを、南米をはじめとする世界各国に普及したことは象徴的協力案件です。

日本の交番制度をモデルにした地域警察システムに関する協力は、20 年近くにわたり行われ、今日、サンパウロをはじめとする様々な州で『交番制度』が導入されています。

防災分野でも、土砂災害対策などソフト・ハードの双方に渡る幅広い協力が行われてきています。

今年は、1959 年に日伯経済協力が開始されて 60 年になります。日本の協力は、先生が生徒に一方的に教える、指示するというようなものではありません。ブラジルにおける日本の協力の歴史は、日本人とブラジル人が共に考え、議論し、共に汗を流して働き、ブラジルの発展のために共に貢献してきた歴史といえるでしょう。

(4) さて、2014 年安倍総理は、日本の総理としては 10 年ぶりにブラジルを公式訪問し、ルセフ大統領と会談し、『日伯の戦略的グローバル・パートナーシップ構築に関する共同声明』を発出しました。私自身、中南米局長として総理のブラジル訪問の企画の任務に当たり、この訪問に同行したので、強い印象を持っています。すぐ後で触れますが、この訪問の際、安倍総理は、サンパウロで「Juntos! 日本・中南米協力に限りない深化を」と題する、政策スピーチを行いました。

日伯関係は順調に進展するかに思えたのですが、その後のブラジルの政治的・

経済的危機の状況下で日伯経済関係はやや停滞傾向に向かい、日伯の貿易・投資も近年は遞減してきていました。しかし、ブラジル経済も回復の兆しを見せる中でも、日本企業のブラジルに対する関心もまた高まりつつあります。

それでは、これから、日伯関係の今後の展望について、話を進めていきましょう。

3. 日本とブラジル～今後の展望

(1) 先に触れたとおり、2014年8月、安倍総理はここサンパウロで、対中南米政策スピーチを行いました。安倍総理はそこで、日本の対中南米外交の指導理念である、「3つのジュントス」を発表したのです。

「3つのジュントス」とは何か。

一つ目は「発展を共に」。経済の結びつきを一層深め、互いに経済的利益をもたらそうとするものです。

二つ目は「主導力を共に」。国際社会の諸課題に立ち向かう上で共に主導力を発揮していくことです。

最後の三つ目は「啓発を共に」。子孫に平和で豊かな世界を残していくため、人的交流を進めて共に啓発しようとするものです。

キーワードは、「ジュントス」。この3つの指導理念は、日本とブラジルが、イコール・パートナーとして協力を進めていこうという哲学に基づいています。

(2) 今年、安倍総理とボルソナーロ大統領は何回会談しているか、ご存じでしょうか。1月の「ダボス会議」の機会、6月の「G20大阪サミット」の機会、そして10月の「即位の礼」の機会の、計3回です。近年、1年にこれほど両国首脳が会った例はありません。両首脳の間個人的なケミストリーは大変良いものがあります。こうした緊密な首脳間の交流を背景に、日ブラジル関係の強化に向けたモメンタムは高まっています。

2020年は、この「3つのジュントス」の下で、日ブラジル関係を更に発展させる上での重要なチャンスが訪れるでしょう。こうしたチャンスを生かして、日ブラジル関係を一層進展させていきたいと考えています。それでは、具体的にはどうしていくのか。

(3) 一つ目のジュントス、「発展を共に」の柱におけるチャンスは、ブラジルにおける構造改革の進展です。ボルソナーロ政権下のブラジルは、構造改革を通じ、「新しいブラジル」へ移行しようとしています。

今年、ブラジルは、年金制度改革を実現しました。さらに、税制、財政、行政改革も推進しています。日本はこうした改革の進展に期待しています。また、ブ

ラジルは、各種経済ルールに関するグローバル・スタンダードの導入を進めつつ、OECDへの加盟を目指しています。日本はブラジルのOECD加盟を強く支持しています。

さらにブラジルは、貿易自由化を積極的に進め、この1年間で、メルコスールとEU及びEFTAとのFTAが実質合意するなど、大きな成果を挙げています。また、ビジネス環境の改善を通じた外国投資の誘致も積極的に推進しています。これが日伯貿易・投資関係の拡大と円滑化につながることを期待しています。

こうしたブラジルでの構造改革の進展と経済の回復に伴い、日本企業のブラジルへの関心も戻りつつあります。

最近、日本企業によるブラジルでの大型投資が連続しています。ブラジル経済省 CAMEX の統計によれば、今年の第3四半期のブラジルに対する外国からの投資に関し、実際に確認された投資額でみると、最大の投資国は日本で、その金額は約42億リアルにもものぼります。

少し例を挙げると、3月にソフトバンクグループは、南米向けの約210億リアルの投資ファンド設立を発表し、これまでにブラジル企業10社が投資を受けています。また、9月にはトヨタが新型車の生産拡大のために10億リアルの投資を発表しました。トヨタはブラジルにおいて、日本とブラジルの技術を結集した、世界で唯一の、ガソリンとエタノールが使用可能な「フレックス燃料ハイブリッド車」を生産しています。

ブラジルにおける改革の進展というチャンスをつかえ、2020年には両国の経済関係を更に緊密化させ、更なる発展を共に実現していきたいと思っています。そのための手立てとして、2つの取組に触れたいと思います。

1つは、日メルコスールEPAについてです。日メルコスールEPAに関しては、日本とブラジル双方の産業界から、その締結を強く求める声が上がっています。また、メルコスール側には、同EPA締結に対する大きな期待があると承知しています。一方で、現在日本政府は同EPAについて引き続き慎重な検討を進めているところです。日メルコスールEPAは、もし実現すれば物品貿易の関税削減のみならず、通関等の貿易手続の円滑化や行政手続の簡素化といったビジネス環境改善をはじめ経済関係全般の拡大にも資するものです。現在、協定交渉について見通しは立っておりませんが、私は、日本とブラジル(メルコスール)双方の経済にとってウィン・ウィンの協定になり得ると考えており、個人的には、日本メルコスールEPAの交渉の早期開始を期待します。

もう一つは、ブラジルにおける豊富な鉱物資源の中の、ニオブやグラフェンの活用における協力です。ニオブはレアメタルの一種でたとえば鉄に混ぜるとその強度を増大させることができ、その合金は超電導磁石などに使われます。グラ

フェンは、炭素原子のシート状物質でダイヤモンド並の強度を持ちながら柔軟に折り曲げることができ、導電性や耐熱性の高さなどからも注目されています。ボルソナー口大統領もブラジルに豊富に存在するニオブとグラフェンに強い関心を有していると承知しています。その活用のために、日本とブラジルの技術を持ち寄って協力を進めたいと考えています。

(4)「発展を共に」の柱におけるもう一つのチャンスは、イノベーションです。日本とブラジルが直面する開発課題に対し、イノベーションを通じて両国が共に取り組んでいきます。今日はイノベーションを活用した、新たな日・ブラジル協力案件を2件発表します。

第1に、日本とブラジルは、衛星及びAIを駆使した、アマゾンでの違法森林伐採対策で協力することを今般決定しました。スクリーンの写真をご覧ください。このプロジェクトでは、日本の宇宙航空研究開発機構(JAXA)が打ち上げた、雲を透視して撮影する機能を有する人工衛星の画像を活用して、違法伐採の早期発見につなげようとするものです。また、日本のAI技術を活用し、アマゾンにおける森林伐採の予測システムを構築します。こうした対策の実施を、JICAを通じて支援していきます。

第2に、日本は、ブラジルにおいて、AI、ビッグデータ、ドローン等の先端技術を活用した「精密農業」の導入に向けた協力を開始することを今般決定しました。スクリーンの写真をご覧ください。ドローンで農作物の生育状況を診断したり、そうして収集したデータを無人ヘリに読み込ませ、適切な肥料を散布したりします。こうしたイノベーションを活用した精密農業をブラジルにおいて導入するため、JICAを通じて支援していきます。精密農業の導入は、農地の生産性、収益性を高めることができます。さらに、土地あたりの生産性が高まれば、違法な焼畑によって農業用地を確保しようとするインセンティブを減少させることができますので、アマゾン森林の保護にも貢献します。

このようなイノベーションを生み出す原動力となるのは、科学技術です。日本は、アジアの他国を遙かに引き離す数のノーベル賞を受賞してきました。こうした日本の強みも活かしつつ、科学技術分野での協力を日ブラジル間で推進していきたいと思えます。この分野での協力は大きな可能性があり、来年は大きな進展を期待しています。

(5)さて、2つ目のジュントス、「主導力を共に」の話に移ります。日本とブラジルは、自由、民主主義、人権の尊重、法の支配といった基本的価値を共有しており、両国の国際場裏での協力は、より大きな責任と価値を帯びるようになってきています。2020年に協力を一層進展すべき分野を4つ挙げたいと思えます。

第1に、国連安保理改革です。2020年は国連創設75周年です。しかし、安保理常任理事国の構成は基本的に1945年当時のまま変わっていません。75年の間に国際社会は大きく変化しました。そうした変化を適切に反映すべく、日本とブラジルは、改革された安保理において新規常任理事国になるべきです。そうした改革を実現するため、日本、ブラジル、インド、ドイツから成る「G4」という枠組の下、日ブラジル両国の連携を引き続き進めたいと思います。

第2に、WTOでの協力です。日・ブラジル両国は、共に自由貿易を推進し、多角的貿易体制の維持・強化を重視しています。そこで、多角的貿易体制の中核であるWTOにおける両国の連携は重要です。ブラジルは、WTOにおける、途上国の義務の免除や緩和を可能とする「途上国の特別のかつ異なる待遇 (Special and Differential treatment)」の放棄を表明し、日本はこれを評価しています。より責任ある立場となったブラジルと、WTOでの様々な協力を建設的に進めていきたいと考えています。

例えば、日本は議長を務めた今年6月のG20大阪サミットで、データ流通や電子商取引に関する国際的なルール作りを進めていく「大阪トラック」の開始を提案し、既に開始されています。こうしたWTOでの新たなルール作りの取組で、同じくG20のメンバーであるブラジルと緊密に連携していきたいと思います。

第3に、持続可能な開発目標、すなわち「SDGs」の達成に向けた協力です。気候変動や海洋プラスチックごみ等の地球規模課題に対応し、SDGsの達成に向けて共に取り組んでいく上でも、共にG20のメンバーで、国際社会で責任ある立場にある日本とブラジルは重要な協力パートナーです。

気候変動については、日本とブラジルは、『「気候変動に対する更なる行動」に関する非公式会合』の共同議長を務め、2002年から毎年東京で開催してきました。この会合は、前年の国連気候変動枠組条約COPの成果を振り返り、その年の交渉の方向性を模索する機会として重視されています。こうした取組を通じて、気候変動問題への対応において、ブラジルと共に国際社会でリーダーシップを発揮していきたいと思います。

近年の喫緊の地球規模課題である海洋プラスチックごみへの対策についても、日本とブラジルの協力は重要です。G20大阪サミットにおいて、海洋プラスチックごみによる新たな汚染を2050年までにゼロにすることを目指す「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」を共有しました。このビジョンの実現に向けて、日ブラジル両国で緊密に協力していきたいと思います。

第4に、海洋における法の支配、航行の自由の確保に向けた協力です。日本もブラジルも、自由な海を舞台とする自由貿易を通じて豊かさと繁栄を享受して

きました。法の支配，航行の自由はその礎であり，その重要性を両国は共に認識しています。

日本はこうした考え方に基づき，「自由で開かれたインド太平洋」構想を推進しています。それは，①法の支配，航行の自由，自由貿易等の普及・定着，②質の高いインフラや連結性等の推進を通じた経済的繁栄の追求，③インド太平洋沿岸諸国の能力構築支援等を通じた平和と安定の確保をインド太平洋地域において実現しようとするものです。これらの基本的な考え方は，インド太平洋地域に限らず，世界中どこでも適用されるべき普遍的な原則であると思います。

インド太平洋，あるいは大西洋という，ブラジルとアジアをつなぐ海洋における法の支配，航行の自由の確保は，ブラジルとアジアの間の貿易関係を安定的に維持・強化していく上で重要です。そのために日本は，この海洋に関する基本原則が徹底されるよう，国際場裏でブラジルと共に声を上げ，必要な発信をしたいと思っています。

（6）最後の「ジュントス」の柱，「啓発を共に」についてお話しします。私は常々，駐伯日本大使としての大きな仕事は，日本とブラジルの間の，あらゆる分野の人たちの双方向の交流の促進であると思っています。双方向の交流を促進していくに当たって，2020年には，東京オリンピック・パラリンピック，及び在日ブラジル人コミュニティ30周年という2つの大事な機会があります。

2016年のリオの後を引き継いで，来年東京でオリンピック・パラリンピックが開催されます。「リオから東京へ」をスローガンに，各種スポーツでの両国の交流を一層推進する契機としたいと考えています。

日本サッカーは，ブラジルから多くの選手，コーチを迎え，ブラジル・サッカーから教えを受けながら進歩してきました。今年の日本サッカーは，ブラジルとの縁が深かったということをご存じでしょうか。

6～7月にブラジルで開催されたコパアメリカに日本は招待国として参加しました。日本は惜しくもグループリーグで敗退しましたが，ブラジルは見事優勝しました。

10～11月にブラジルで開催されたFIFA U-17ワールドカップでは，ベスト16でメキシコに敗退しましたが，ブラジルは決勝でそのメキシコに勝利して見事優勝します。

東京オリンピック世代のU-22日本代表とU-22ブラジル代表は，今年2試合を戦いました。6月のトゥーロン国際大会の決勝で対戦し，PK戦の末ブラジルが勝利しました。10月にU-22日本代表がブラジルに遠征した際は，日本が3-2で勝利しました。東京オリンピックでも，日本とブラジルの決勝戦を是非見たいものです。

次に、柔道です。日本発祥のスポーツ・柔道の競技人口で、ブラジルは世界最多を誇ると言われています。柔道のブラジル男子代表の監督は、日本人である藤井裕子氏です（写真を表示）。リオ五輪でブラジル女子柔道の監督であった藤井氏の指導の下、ブラジル男子代表の躍進に期待しています。2017年の柔道世界選手権の団体戦では、日本が金メダル、ブラジルが銀メダルでした。駐ブラジル大使として、東京五輪でもこの結果が繰り返されることを希望しています。それが実現したら、サッカーの金メダルはブラジルに譲ってもいいかなと思います。サッカーや柔道の話をし出すと、私にはもう1回講演が必要なのでこの辺にします。

なお、柔道については、ブラジルの学校カリキュラムの中に柔道が組み込まれるよう、ブラジルの指導者を日本に招聘したり、日本の指導者をブラジルに派遣したりするなど、日本は必要な協力を行ってきており、引き続きこれを推進したいと思います。

(7) 次に、2020年の在日ブラジル人コミュニティ30周年についてです。1990年の日本での改正入管法の施行を契機に、日系ブラジル人が日本での就労を始め、2018年末時点で約20万人のブラジル人が日本に居住しています。在日ブラジル人コミュニティ30周年という節目を捉え、様々な行事を通じて、ブラジルの日系人社会のみならず、在日ブラジル人コミュニティとの絆も一層深めたいと思います。

私はこれまでブラジルで最も著名な漫画家であるマウリシオ・ソウザ氏に何度かお会いしました。ソウザ氏は、在日ブラジル人の子供たちが日本の学校や社会に適應できるよう、日本の小学校生活を説明するストーリーの漫画「モニカ&フレンズ」を制作し、日本の学校などに寄贈しています（写真を表示）。在日ブラジル人が日本社会で共生できるような努力を、両国双方が重ねていくことも重要と思います。

さらに、アカデミックな交流を通じた「啓発」も来年はもっと盛んになります。例えば、7～8月には両国の学者が進めている、政治、経済、社会等幅広い分野における日伯関係に関する共同研究の報告会がブラジリアで行われる予定です。

また、日本大使館では、伝統文化から日本のポップカルチャーに至るまで、文化関係のイベントや、対日観光促進や日本食・日本酒の普及に向けた行事を検討しています。なお、今週土曜日14日に、私はここジャパン・ハウスにて「日本のマンガ」をテーマとする講演も行う予定としておりますので、ご関心のある方は是非お越しください。

「啓発を共に」していく際、言語の理解が重要です。ある国の言葉を学ぶこと

は、その国の文化・社会を理解する上で極めて重要です。ブラジルでの日本語普及のため、サンパウロ大学やブラジリア大学といった日本語学科をもつ大学との協力を通じ、日本語教師の育成に努めます。e-Learning 教材の開発・提供を含め、ICTを活用した日本語教育の推進にも力を入れていきたいと思っています。

5. 結び

先に言及した安倍総理の演説の「Juntos」のことばには、日本がブラジルをはじめとする中南米の国々と『共に』あるということ、（上下関係ではなく）友人（Amigos）として、パートナー（Parceiros）として『共に』歩み、協力していきたい、と言う思いが込められています。それは、スピーチ起草に当たっての、長年中南米諸国と関わってきたかくいう私の思いでもありました。

現在、日本とブラジルの関係は素晴らしく良好ですが、様々な分野において発展の余地はまだまだ広大だと考えています。そのためにやるべきことはたくさんあります。

『両国関係の最良の時は、さらにこれからやってくる』と楽観的に日本とブラジルの将来を示して、私の話を終えたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

（了）